

へき地・小規模校教育実習の実際

— 沼牛小学校の事例紹介 —

北海道教育大学岩見沢校

前田賢次

はじめに

幌加内町での実習に私が直接関わったのは、1997年度から2000年度までの4期である。私はこの間、幌加内町立沼牛小学校に大学側の引率教官として参加してきた。ここでは、その間の出来事から実習の概要を紹介していくこととしよう。

1 事前指導について

幌加内町では沼牛・清和・添牛内（99年閉校）・朱鞠内・母子里（93年閉校）・幌加内（2000年より低学年学級が複式となり実施）の小学校で実習を行っているが、いずれも宿泊施設として学校に併設されている「生活改善センター」（校区公民館といえいいだろうか）に泊まり、朝食・夕食は自分たちで自炊するのが原則である（昼食は児童と共に給食をいただく）。つまり5泊6日の間、学生も引率教官も、文字通り「同じ釜の飯を食う」わけである。そこで、事前指導の最後に配属校毎に集まって、食事のメニューや買い出しの計画の相談から始まる。参加学生は2年生と4年生であるが、4年生については原則として2年生時の実習で配属された学校に再配属するように調整を行っている。この4年生を中心に実習時の幌加内の気候（大学のある岩見沢から見ると幌加内は100kmほど北に位置するが、冬の訪れは驚くほど早い）、個人的な連絡の取り方（例えば、沼牛の場合、20時以降は公衆電話のある幌加内町中心部まで車で15分ほどかかり、携帯電話の電波は届かない）、食料品や日曜物資の購入方法（店も電話と同様、離れている）、改善センターにはテレビがない等々、都市部に住む学生にとっては驚愕すべき情報が2年生にもたらされる。また、大学教官から「この実習の立ち上げ次期には、体育館に寝袋で寝泊まりし、家庭科室で自炊をしていたが、いまは学校の好意で毛布と布団を準備していただいている」などという話が紹介され、追い打ちがかけられる。この相談を通じて、学生の実習へのレディネスは必然的に高まっていく。

また、実習生が実際に授業を行うための資料が小学校から郵送され、実習までに予習として教育内容・教材研究を各実習生が個別に行い、学習指導案が用意される。

2 幌加内町立沼牛小学校の教育実習

幌加内では各学校ごとに作成された計画に沿って、教育実習が実施される。次頁（図-1）は、1997年度の沼牛小学校の計画表である¹。計画表の背景に沼牛小のどのような理念があるのかを、当時実

習計画作成にあたった中橋智幸教諭の記述から眺めてみよう。

まず大学側の実習目的として以下の原則がある。

へき地教育実習	二年目学生を対象とし、へき地教育に関する概論について講義し、同時にへき地の学校・子ども・地域などに実際にふれることにより、へき地教育についての一般的・具体的認識を得る。観察参加を中心とする。
小規模教育実習	四年目学生を対象とし、「へき地教育」を基礎に、また三年目で行った教育実習の経験の上に立って、実際に複式授業などの実践を行う。(観察参加に加えて教壇実習を体験する)

図一 幌加内町立沼牛小学校の教育実習計画

	時 間	事 項	備 考
第一日目	11:15	実習生、沼牛小学校着	
	11:20~11:45	宿舍へ	荷物整理
	12:05~12:10	着任式	教職員への挨拶
	12:15~12:35	昼食	実習生は持参の昼食をとる
	12:45~13:00	児童との対面式	挨拶の後、児童会主催のスタンプに参加
	13:05~13:30	実習日程・服務上の注意、心得	学校長・教育実習担当教員から
	13:30~14:15	授業参観（五校時）	各配属学級で
	14:40~15:30	各担任の指導・教材研究	児童の様子や授業準備について
	15:30~	職員体育	パークゴルフ
第二日目	8:00~8:10	職員朝会	
	8:10~8:20	教生打合せ	
	8:20~9:05	講義「経営と重点・複式教育」	実習生全員が図書室に集まって聴講
	9:15~10:00	授業参観	各担当学級で
	10:20~10:40	政和小学校へ移動	バスで移動
	11:00~14:25	集合学習参観	午前中は体育、給食をはさみ午後は音楽
	15:00~	各担任の指導教材研究	帰校後、各担当教諭と
第三日目	8:00~8:10	職員朝会	
	8:20~12:00	授業参観・授業実習	一校時から四校時まで
	12:10~12:35	給食	食堂で実習生と子どもで食べる
	12:40~13:25	昼休み・清掃	実習生は子どもと行動を共にする
	13:30~14:15	授業参観・授業実習	
15:00~	各担任の指導教材研究	各担当教諭と	
第四日目	8:00~8:10	職員朝会	
	8:20~9:05	授業参観	各担当学級で
	9:15~12:00	四年学生の研究授業	二校時から四校時まで、実習生は全ての研究授業に参加
	12:10~12:35	給食	食堂で実習生と子どもで食べる
	13:00	児童下校完了	
	13:00~13:30	授業研究物整理	各四年学生実習生が授業研究のための資料を整理する
	13:45~15:30	授業研究	各教室を移動しながら、三つの研究授業についての討議
	16:00~	反省交流会	食堂で
第五日	8:00~8:10	職員朝会	
	8:20~10:00	授業参観・授業実習	各担当学級で
	10:20~10:50	離任式・お別れ会	児童会主催のお別れ会の後、離任式
	11:00~12:00	大学バスで幌加内町に移動	
	12:30~13:00	離任式	幌加内町での教育実習生全員が教育委員会に集まって行う

沼牛小では大学の教育実習の目的は「日程上、目的を全て網羅することは非常に難しい」ため、この目的を沼牛小として「再設定」したと述べている³。概観すると、授業は教師による児童の実態把握の上に位置づくるものであり、そのために短い実習期間ではあるが「児童一人一人と直接接触できる時間」（休み時間・遊びの時間）を確保する、教育内容研究については事前指導で仮に指導案を作成するという前提に立って以下の指導指針を具体化し整理している⁴。

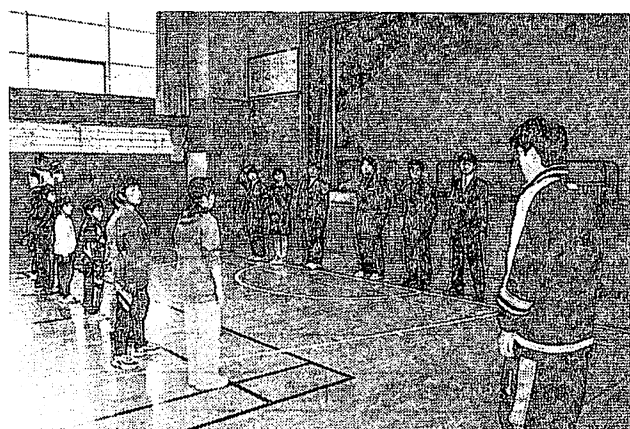
二年目学生には	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同内容指導を主とし、参観，授業体験を行う。 ・ 初めての授業となるので，指導案については，ごく簡単な展開部分の略案でよい。 ・ 授業の中では，自分がやってみたいことを中心として考えてよい。
四年目学生には	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異内容指導の授業を行うため，それに向けた参観，準備が中心となる。 ・ 「わたり」と「ずらし」等を体験する。 ・ 複式独自の指導案の書き方で指導案を作成する。 ・ 児童の発達段階を考え，オリジナリティのある授業を作る。

つまり同内容・異内容の差異はあると言え、2年生にも3年生にも授業実習とそのための児童観察が、沼牛小学校での教育実習の意義として積極的に具体化され位置づけられている。

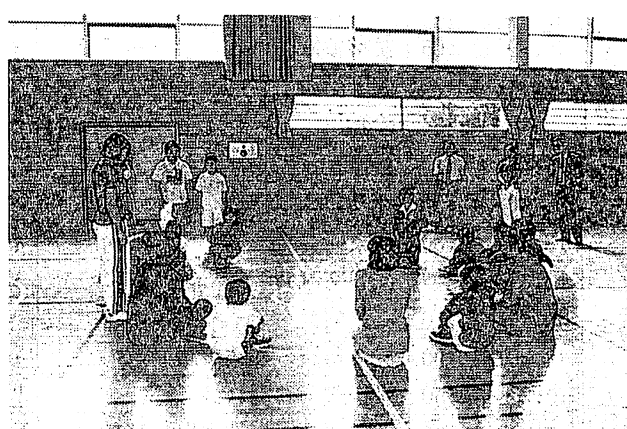
(1) 子どもとのふれ合いについて

沼牛小では、実習の指導指針に沿って、子どもと実習生の交流を円滑かつ効果的にするための「てだて」が用意されている。実習初日の児童との対面式では、子どもたちから手づくりのネームプレートが実習生に贈られる（これは引率教官である私も例外でなく、例年、熊のネームプレートをいただいている）。実習生は期間中、このネームプレートをつけて過ごすことになる。また、対面式のスタンツでは実習生の担当学級以外の子どもたちとの交流を図るために「名前ゲーム」が恒例となっている。ほとんどの実習生は対面式のゲームの間に子どもの名前を覚えてしまう。また、全ての休み時間は、授業案作成や事務処理よりも、子どもと行動を共にするように学生に対して指導がなされる。この子どもたちとの交流を通して、後に紹介する授業づくりのヒントを獲得する学生が多い。

3年次に行われる小学校教育実習で、学生の苦悩として「子どもがなついてくれない」「子どもとどう交わったらいいのかわからない」といった声があがるのが少なくない。これらの学生の多くは「自ら関わっていく」ことが教師の指導性であることを客観的に捉えきれていないために、「なつかない」理由を子どもに還元してしまう恐れがある。沼牛小では先の子どもに関わらざるを得ない場面



子どもたちとの対面式

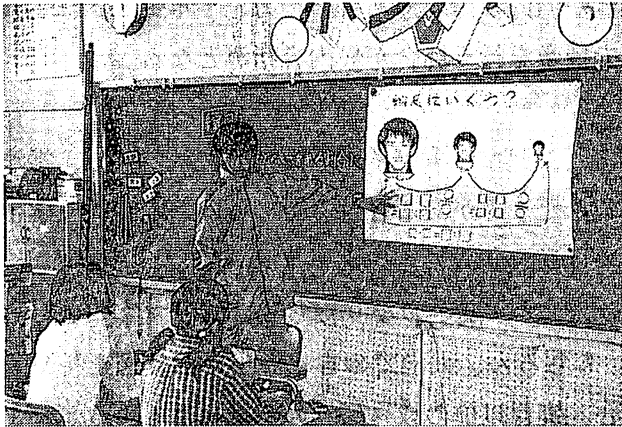


恒例・名前ゲーム

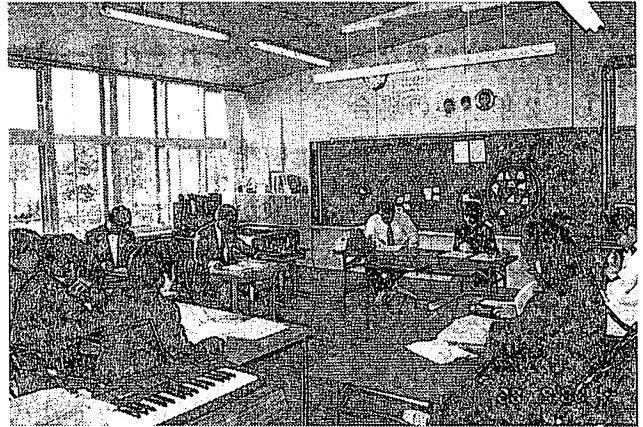
② 4年学生の場合

4年生の場合、3年次に小学校教育実習の経験を経ていることから、異内容指導の授業実習が取り組まれる。教科は算数科で、1人平均3時間から5時間くらいである。2つの学年の教材研究と、それらを組み合わせて同時に指導する技術「ずらし」を体験し、研究授業につなげてゆくことが目的である。もちろん、加えて同内容指導の授業を行う学生もいる。

2年生、4年生とも授業反省は子どもが下校した後、担任教諭と共に行われる。またそれ以外にも、学校長や授業を参観した他の教諭から指導をいただくことが多い。また学生同士の助言や意見交換も行われ授業者の次なる授業実習へと自覚的にフィードバックされる。



4年生学生の研究授業



授業研究での検討

(3) 研究授業と授業研究

研究授業は大学4年生が行う。全ての実習生はもとより、沼牛小の教職員全員で、低・中・高全ての研究授業を参観し授業研究が行われる（図-3 4年生の指導案）。研究授業の状況を具体的に検討するために、授業時の板書が保存され、3つの教室を順番に会場として用い検討がなされる。授業研究の内容および討議の観点は以下のようにになっている⁵⁾。

- 授業反省（授業者から）
 - ・ねらい（目標）の達成度
 - ・発問と子どもの反応
 - ・授業のながれ（過程）
 - ・教材の工夫、準備
- 全体討議
 - ・教材観、発問、板書、子どもの反応・活動、わたり 等
- 2年目学生からの感想発表
- 講評、その他

図-3 4年生学生の指導案

算数科学習指導案

日時 平成12年9月28日(木)第3校時
 児童 第3学年 男子1名 女子1名
 第4学年 男子1名
 指導者 明上山 雅代

第3学年

1.単元名 「三角形」
 2.(1)本時の目標
 ひごを使っていろいろな三角形をつくり、辺の長さに着目して分類することができる。

(2)本時の展開

第4学年

1.単元名 「四角形」
 2.(1)本時の目標
 平行と垂直に着目しながら、たくさん四角形を分類することができる。

(2)本時の展開

段階	第3学年	第4学年	段階
児童の活動	既習事項の想起。 課題を確認する。	用意された四角形を簡単に仲間分けする。	応用・発展
教師の活動	三角形の辺と角の数を確認する。 課題を提示する。	前時で作った四角形(桃色)に台形(平行四辺形、ひし形)を加えて提示する。	課題把握
課題把握	いろいろな三角形をつくってみよう。 ひごを組み合わせて三角形を作る。 できた三角形を画用紙に貼り、黒板に提示する。	平行・垂直がどんなものかを確認する。 課題を確認する。 「平行」「垂直」を使って、四角形のなかま分けをしてみよう。	課題追求
課題追求	二人合同で課題に取り組む。わからなくなったらヒントカードを見る。	課題に取り組む。わからなくなったらヒントカードを見る。 ① 今までに習った四角形をさがしてみよう。 ② 平行四辺形をさがしてみよう。 ③ 平行四辺形が2つあるものをさがしてみよう。	解決・定着
解決・定着	なぜそのように仲間分けをしたのか理由を考えてカードに書く。	カードを配る。 書いたことを黒板に貼り、仲間分けを完成させる。 台形の名称を知る。	解決・定着

板書計画

<p>三角形…辺3本・角3つ</p> <p>三角形をなかま分けしてみよう。</p>	<p>四角形</p> <p>「平行」「垂直」を使って四角形をなかま分けしてみよう。</p> <p>角が全て直角 平行1つ 平行2つ どれもない</p> <p>正方形 長方形 台形</p>
---	---

3.本時の評価
 ひごを使っていろいろな三角形をつくり、辺の長さに着目して分類すること

3.本時の評価
 平行と垂直に着目しながら、たくさん四角形を分類することができたか。

(4) 学生の一日について

実習2日目から4日目の学生のタイムスケジュールの実態は、先の(表-1)以外の部分がある。小学校で過ごす時間以外は宿泊場所である生活改善センターでの生活である。おおよそ学生の一日のイメージは以下のようなものである。

期間中、学生たちは寝食を共にする。実習もさることながら一番の課題は食事と入浴と睡眠の時間確保である。まず、食事。昼食は給食をいただけるが、朝夕は自炊である。夕食は例年、カレーライス、シチュー、肉じゃがといったメニューである。朝は夕食の残り、パンかご飯が主となる。気の毒なことに、沼牛小の教職員の方々が、学生の教材研究の進み具合と貧弱な夕食を心配して、手作りの料理など差し入れを携えて生活改善センターを訪問していただいている。ただでさえ実習生の指導で負担をかけていることを思えば、本当に頭の下がる思いである。また、入浴も車で40分ほどかかる温泉施設まで学生を乗せてつれて行っている。こうして、食事と入浴は、沼牛小の教職員の並々ならぬ尽力に甘えて快適な実習生活を送っているのが実状である。

さて、残された睡眠の問題である。夕食と入浴が終わるとおおよそ20時頃となる。実習生たちは、早速、明日の授業の教材研究に取り組む。大学の引率教官として私が最も楽しみにしている時間でもある。4年生は実習経験もあり、小学校での担当教諭

2 年 生		4 年 生	
7:00	起床 朝食準備・朝食・後かたづけ	7:00	起床 朝食準備・朝食・後かたづけ
8:00	登校	8:00	登校
17:00	宿舎着 夕食準備・買い出し		
18:00	政和温泉で入浴（往復60分＋入浴30分）	18:00	政和温泉で入浴（往復60分＋入浴30分）
19:30	夕食・あとかたづけ	19:30	夕食
20:00	実習生通信づくり，教材研究・略案作成	20:00	実習生通信づくり，教材研究・略案作成
24:00 頃	就寝	2:00 頃	就寝

との打合せに従ってそれぞれ作業を行う。私は専ら2年生の相談に乗ることにしている。指導案の書き方の「いろは」から、目標の立て方、発問や質問、指示の留意点などが相談の内容である。時には、改善センターの黒板を利用して、2年生が模擬授業を行うこともある。このようなちょっとした助言で、時には2年生とは思えない授業を行う学生も出て来る（図-4）。2年生は同内容指導による授業の準備であるので、比較的早く作業が完了する。4年生は異内容による授業準備なので、単純に考えても二倍の作業量（教材づくりと指導案作成）となる。そこで、自分の作業の終了した2年生が中心となって、「教育実習生通信」の作成が始まる（図-5）。それも終わると、今度は2年生は4年生の教材作りなどを手伝う。おおよそ、2年生は12時頃になると就寝するが、4年生は真夜中まで教材研究を行っている。引率教官として、「寝不足では授業はできない」とか「できたところまでで授業しなさい」等と注意して、何とか学生をあきらめさせようと試みるも、常に果たせたことはない。結局午前2時頃までは私も学生たちにつき合うが、最後には音をあげて「徹夜だけは許さない。必ず少しでも寝ること」と厳命して先に床につくのである。実習最終日の前夜ともなると、最終日の授業実習を希望した学生たちは、授業準備を終えた後、東の空が明るくなるまで離任式での子どもたちへの出し物の練習を行う。若者が持つ情熱に圧倒されるばかりである。



協力して教材づくり



明日の授業の指導案作成と教材研究

図一 4 学級通信で実習生の授業紹介

どってんこいた

幌加内町立沼牛小学校 1・2年学級だより
1998年9月19日(土) NO. 96

りな先生 すこいしょ



兎もよめるあやうの?
でもよめるよ

木曜日の1時間目には、ゆうきりな先生が、国語のじゅぎょうをしてくださいました。べんきょうしたのは、「大きなかぶ」の、おばあさんがまごをよんでくるばめんです。

りな先生は、黒板に、大きくてきれいなじで、べんきょうするところのおはなしを書いてくださいました。きょうかしょを見ないで、黒板を見ながら、よむれんしゅうです。このときの3人のこえは、まだきんちょういていたせいか、とても小さなこえでした。



ますます大きなこえの
3人くみ

「だれとよもうかな?」と、りな先生がいうと、「力也くんと」と詩歩さん。つぎに拓実くん一人で、力也くんと拓実くんと、3人でと、だんだんと元気が出てきました。すると、りな先生が、「うんとこしょ、どっこいしょ」の部分が消してしまいました。でも、みんなはじしんまんまん。大きなこえでよんでいきます。するとまた、りな先生が黒板けしをもって、なんと、よこにけしてしまったのです。



それひっぱれ!
ぬかれないぞ!

これには、3人だけではなくて、中はしもびっくり!しかも、だんだんときえていくところがおおくなっていきます。1・2年生の3人は、どんどんべんきょうにひきこまれていきました。

「きょうも、かぶをぬいてみましょう」ということになって、みんなでだいこんぬきからかぶぬきへ。このときにはもう、たのしくてたのしくて、みんな大はしゃぎでした。見ていても、とても楽しいじゅぎょうでした。



りな先生を
ぬいちゃえ!

9月17日
(木)

(拓実くん)
こくごで、だいこんぬきをやってたのしかったです。けど、りな先生がぬけなくて、くやしかったです。

2人の感想文でも、この授業が、とても楽しかったんだなあと感じます。

実習生の授業が、全て楽しいというわけにはいきませんが、中にはこうした非常に記憶に残るような授業をしていく先生もいます。3人とも、「また来てくれないかなあ」と、何度も呟いていました。

(詩歩さん)
きょう、ゆうきりなせんせいと大きなかぶをやって、ゆうきりなせんせいのかぶをぬこうとしましたが、ぬけなくてくやしいのでこんどはぬきたいとおもいます。さんすうで、じゅんこせんせいとおべんきょうをやって、きょうは、おべんきょうはちょっとむずかしかったです。ずこうのねんどで、じゅんこせんせいのかおをつくって、じゅんこせんせいにかわいいねっといわれてよかったです。

図一5 日刊「実習生通信」



3 実習後も継続する学生たちの取り組み

(1) 電子メールでの交流 (沼牛小ホームページ <http://www2.ocn.ne.jp/~numashondex2.html>)

1997年当事、低学年学級を兼任担当していた瀬川明廣教頭と、電子メールを用いて小学生と大学生の交流を図る試みの相談を持った。具体的には、・実習の事前指導としての交流、・事後指導としての交流、・その他、小学校での実践にかかわる協力の三点であった。実習終了後、「沼牛小学校とメール通信をしてみても」と実習生にもちかけた。学生たちは早速、メールリテラシーの獲得に励み、試行錯誤しながらメールのやりとりが交わされた。全ては紹介できないので、一部をあげておこう。(括弧内は1997年当時のもの)

「ひろひとは元気ですか」三浦綾乃 (実習生・2年生)

沼牛小学校のみなさんお元気ですか。わたしは風邪をひきました。でも学校祭・学習発表会みたいなものですので係をしているので忙しいです。11月16日には、学芸会をとっても楽しみにしています。練習はたいへんかもしれないけどがんばってね。それでは……

「三浦さんへ」瀬川 (沼牛小教頭)

ひぐちせんせい、おげんきですか。みんなげんきです。またきてください。べんきょうしています。ひぐちせんせいもべんきょうがんばってください。てがみをくれてありがとうございます。がくげいかいにきてください。《1年生男子》

きょうせい先生おげんきですか。わたしは、元気です。おてがみどうもありがとうございます。沼牛は、すこし雪がふりました。がくげいかいでは、げきときがくをいちばんがんばりたいです。きょうせい先生たちのもたのしみです。12年生では、ぎゅうにゅうパックではがきをつくりました。はじめてだからちょっとむずかしかったです。でも、うまくできました。がくげいかいは、きょうせい先生みんなできてください。《2年生女子》

きょうせいせんせいおげんきですか。ぼくもげんきです。こっちは、いまでんきです。はがきつくったからね。こっちはどくしょをしてるよ。《2年生男子》

「三浦さん樋口さんへ」 瀬川（沼牛小教頭）

三浦綾乃さん、メールを送ってくれてどうもありがとう。手作りはがきの礼状どうもありがとうございます。1、2年生も、さっそく牛乳パックで、手作りはがきをつくりました。もみじを配したなかなかしゃれたはがきになりました。今度は笹パルプを使って挑戦してみようと思っています。

「樋口英信さんへ」

学芸発表会を通して、子供の変容を確かめていきたいと思っています。1、2年生の教生先生としてインターネットでぜひ協力してほしいと思います。子供の変容にはさまざまな要素が複合しているとおもいますが、一番大きな要素は教師の意欲です。樋口さんも来年度の就職に向けて意欲を持ってがんばっていることでしょう。教育実習生とのインターネットでの交流は、昨年度からの研究テーマでもあります。ぜひ、樋口さんのバイタリテイで、インターネット活用の大きな道筋をつけてほしいものです。難しいことは全然ありません。子供たちに自分自身のことを話せる人がいればいいのです。簡単なメールでいいですから。よろしくお願いします。

「教育実習生の皆さんへ」 菅原（沼牛小学校教諭）

今度は、3、4年生もメールを送りたいと言い出しましたので、チャレンジしてみることにしました。今横に教頭先生がいて、教えてもらいながらキーをたたいています。

「教育実習生へ」 沼小3、4年

K.K（3年男子）より おげんきですか。

I.Y（3年女子）より おげんきですか。さようなら。口が悪いのは先生のせいです。

M.T（4年男子）より お元気ですか。また今度御会いしましょう。なーんてゆうと思ったらおおまちがだよ。くっくっく。

N,Kより（4年男子） どうもこんにちは。けっけっけ。さよなら。です、はい。

Y.K（4年女子）より うーんとね。さようなら。

菅原より 本日、初めて子どもたちがメールを送ります。口の悪いのばかりですが、わるぎはありません。（たぶん）。真澄が元気になったらまた送りたいと思います。それではさようなら。です、はい。ばいばい。

「沼牛小のみなさんへ」 樋口英信（実習生・4年生）

皆さんお元気ですか。僕はいつも通り元気にがんばっています。きのう岩見沢で久しぶりに雪が降りました。朝起きて窓の外を見たら面白くなっていたのに驚いてしまいました。僕は雪のあまり降らないところで生まれたので、雪がとても珍しいのです。そしてとても好きです。窓の外を見たときは子どものようにはしゃいでしまいました。ところで沼牛ではもう雪は降っていますか。そしてみんなは雪が好きですか。ぜひとも教えて下さい。また機会があればメールを送ります。みんなも教生先生にメールを送って下さいね。とても短い内容ですけどこれで終わります。

「ひぐちせんせいへ」 沼牛小1・2ねんより

Y (2年女子) より

樋口先生お手紙ありがとうございます。私はとても元気です。雪はたくさんふっています。私は雪がとってもだいすきです。わたしはふゆになったらかまくらと、スキーと雪合戦とゆきだるまとかであそんでいます。わたしはスキーがすきで、とてもうまくすべれます。12年では、ロボット3号をつくっています。なまえはTPQです。Mちゃんがマットでけがをしたのは知ってますね。まだやすんでいるので学校はなんだかさびしいです。祖父母参観日にガッキとパッチをおしえてもらいました。先生はやったことがありますか。わたしは、はじめてなのでちょっとむずかしかったです。でもたのしかったです。わたしのしょうらいのねがいはピアノとエレクトーンの先生になることといろんな形のパンをつくるパンやさんになることです。

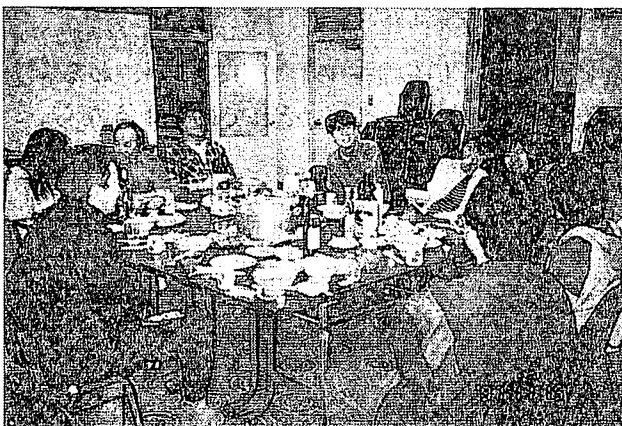
また、お手紙だしあっこしましょうね。とっぴんぱらりのぷう。

H (2年男子) より

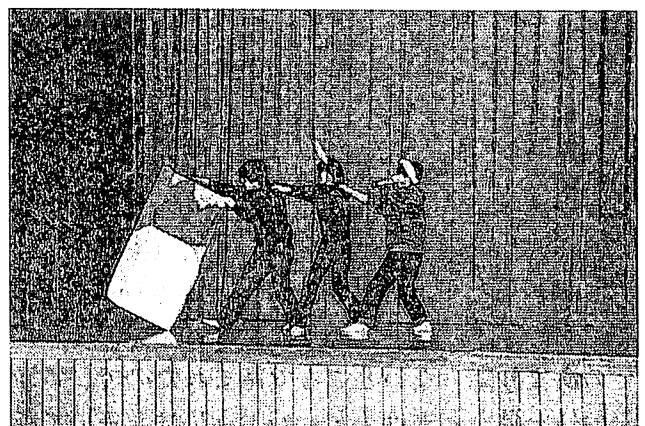
きょうせい先生いつもおてがみありがとうございます。きのう、ゆきだるまをつくりました。雪はとってもだいすきでなんでもしたいくらいです。こんどスキー学習があります。ほくは、がんばります。こっちはみんなでそとで雪であそんでいます。雪合戦をしています。うちには、うさぎと犬ときんぎょとかめがいます。みんなげんきです。きのう、うちにかえってから雪はねをしました。雪のかたまりでトンネルをつくりました。ちょっとむずかしかったです。ほくのしょうらいのねがいは、はかせとパンやさんになることです。またてがみくださいね。H.Oよりバイバイ。

(2) 学校行事への実習生の参加

実習の終了した約1月後、毎年、学生たちは連れだって再び幌加内に赴く。一つは沼牛小の学校行事「沼小学校祭り」、もう一つは「学習発表会」への参加のためである。とりわけ、「学習発表会」へは前日から生活改善センターに泊まり込での参加である。到着した夜は、学生が料理を作り、お世話になった教職員の方々を招いて、ささやかなパーティーを開くことが恒例となっている。ある時には、学生が幌加内名物のそばを打って振る舞ったこともある。また、学習発表会には、教育実習生の出し物が演目の一つになっている。パーティーが終わると、今度は学習発表会の出し物の練習が夜も更けるまで続けられる。



教職員を招いてお礼のパーティー



実習生による学習発表会出し物・劇「大きなかぶ」

おわりに

4年間のへき地・小規模校教育実習を学生たちと共に過ごす中で、私は教員養成教育の到達点と課題についてのいくつかの観点が示されたと考えている。

(1) 本物の中でこそ分かること

「正統的周辺参加」(学習者は「ゆるやかな条件のもとで実際に仕事の過程に従事することによって業務に遂行する技能を獲得していく」という考え方が我が国に流入し、教育学の世界でも取り上げられた⁶)。我が国の教育学は、諸外国の理論の移入を刺激として、大きな転換を迎えることが過去にもあった。一方で、例えば自分たちの目の前にいる学習者の変容から、その理由を分析し、一般化するという作業も、教育の現場では行われてきている。いわゆる「生活教育」をスローガンとして取り組んできた教育研究の成果から「本物によって学ぶ」中でこそ、学習者自身が「学ぶ」ことができるとする主張である。これを教育実習に敷衍してみると、学問として教育学を学んだ学生たちが、教育実習を経て、自分の問題意識を明確にしていくといった言説は数多あったし、これからもあり続けるだろう。「教え方」や「子どもへの接し方」を知りたいとする多くの学生に、それらは「ためにする」のではなく、「自分の目の前の子どもに如何なる教育を施すべきか」の要求の上に成り立つ命題であると気付かせることの困難さは計り知れない。しかし、一方で沼牛での実習を通して多くの学生は以下のような感想を持つのである。

(前略) 学校でいろいろな講義を受けていますが、本当に自分が実際に体験してみないと分からないなと思いました。先生方が常に口をそろえて言う「子供の実態に合わせて」が分かったような気がします。これは大規模、小規模問わず当てはまることだと思います。(後略)

このような学生の「学び」を可能にする条件とはどのようなものであろうか。

(2) 一人一人の子どもとの関係をつくる

ある学生は実習後、以下のような感想を述べている。

特に沼牛小のような少人数では、平均は考えられないから、児童一人一人に合わせて学習を進めなくてはならない。

沼牛小の場合、複式の一学級は5名程度である。数十名の普通規模の学級では、一人一人の子どもの学習の到達度把握には、教師の経験と力量が必要となる。一方、数名の子どもの相手にした場合、授業にどれくらいの子どものが積極的に参加したか、内容が子どもにどれくらい分かったかが鮮やかに浮き彫りにされる。時には、その成否が残酷なまでに子どもから直接、実習生に向けられる。ここでは「おちこぼれ」はありえない。あるとすれば教師による「おちこぼし」なのである。先の実習生の感想は、この事を明確に物語っている。

ある実習生の事例を紹介しよう。低学年のある男の子は、集中して字を書くことがなかなか出来ないうでいた。実習生がその子どもに関わっている間は書くが、他の子に関わると自分の作業を止めて席

を離れてしまうということになった。そのような事もあって実習生は明日の授業の計画に悩んでいた。私はヒントとして、男の子がゲームが大好きで実習生と休み時間に遊んでいたときの様子を実習生に話した。明るく日の授業は実習生の「今日はゲームをします。競争です。教室の中にあるもので、片仮名で書いた方がいいものをさがして見つけてください。見つけたら片仮名でノートに書いてください。時間は五分間。たくさん見つけた人が勝ちです。」という指示で始まった。男の子は熱狂して取り組み、ノートはみるみる間に埋まっていった。実習生に後で話を聞くと、「片仮名で書くモノとコト」の学習に「あの男の子を参加させるためにはどうしたらいいか」を課題として授業の計画を立てたと言うことであった。このような授業づくりのストラテジーは沼牛での実習中、他にも数多く見られる。ここには明確な指導観の転換がある。知識を伝達する、活動をさせるという客体としての子どもから、知識を求め、活動を主体的に行う学習者としての子どものとらえ方である。このような授業設計の理念が、シンプルな教師と子どもの関係をとおして見えてくるのが少人数教室の利点であり、それは、とりもなおさず沼牛での実習の利点でもある。

(3) 複式教育には独自の教育課程編製の知見がある。

ある時、実習生が喜々として今終わった授業を報告してくれた。生活科の授業で「秋」を探しに学校の外を探検し、たくさんの「おみやげ」を子ども達ともって帰ってきたというのである。沼牛小の地域と密接に結びついた授業づくりは、生活科に限ったことではない。廊下や教室に掲示された学習の成果からは、学びの場が地域全体に広がっていることがうかがえる。沼牛小の教諭諸氏は口をそろえて「校区のことは教員よりも子どもたちの方がよく知っている」と述べる。ただし、子どもが知っているのは子どもたちの日常の暮らしの文脈での地域の情報である。もちろんこのことは沼牛小でも自覚されており、だからこそ、授業として地域の素材を取り上げ、子どもたちの過去経験の整理から、学ぶべき教育内容を想定し実践化されているのである。都市部の学校の多くが、学ぶべき教育内容の精選に追われ、柔軟なカリキュラム運用が困難とされる中で、沼牛小の事例は多くの示唆を与えてくれる。複式教育では、複式教育独自のカリキュラム編成の技術が蓄積されてきている。少人数の教師集団が目前の子どもの実態に合わせて、異なった学年を同時に教えるためには、一人一人の教師がカリキュラム編成の主体となるより他にない。ここには、硬直したカリキュラム運用を、教育の主体である教師と子どもがもみほぐし、主体的に作りあげていく姿がかいま見える。実習生が短い期間に行う実習も、このような文脈の中で取り込まれる教育実践の一部なのである。

一週間に満たない実習の最終章は、教職員と児童による実習生たちの見送りである。大学の送迎バスの窓から身を乗り出してさかんに手を振る学生たちの瞳は心なしか潤んでいるように見える。そのバスを手を振りながら追いかける子どもたちの姿。私たちが遠い昔に忘れてしまった美しい絵のような情景が毎年繰り返される。このことだけ



子どもたちと全員で記念撮影

でも、この足取り確かな試みが末永く続くことを願う。

註

- 1 幌加内町立沼牛小学校 「1997年度へき地・複式教育実習」(幌加内町立沼牛小学校 1997.9) PP..2~4
- 2~4 中橋智幸 「1998年度北海道教育大学岩見沢校ワークショップ資料」(幌加内町立沼牛小学校 1999.1.18) PP..7~8
- 5 幌加内町立沼牛小学校 同上
- 6 ジーン・レイブ他 佐伯胖訳 『状況に埋め込まれた学習』(産業図書 1993.11.12) P.7

へき地教育の未来と北海道教育大学の役割

(非売品)

平成13年3月 印刷
平成13年3月 発行

発行責任者

北海道教育大学へき地教育研究施設
吉崎祥司
068-8642 岩見沢市緑が丘2丁目34番地
Tel. (0126)32-0208 Fax. (0126)32-0259

印刷所

正文舎印刷株式会社
003-8642 札幌市白石区菊水2条1丁目
